

TS（トータル・サティスファクション）を目指して M6

「教育的な親切について」

校長室担当より

授業を観察していて、強く感じるがあります。「丁寧だな。」子どもが新しいことを学ぶ場合に、板書やスクリーンを基に、丁寧に一步一步説明する。これは当たり前の教育方針のような気がします。

釈迦に説法かもしれませんが、マサチューセッツ工科大学のローラ・シュルツ教授は4つの仕掛けのついたおもちゃを使って幼稚園児を対象に面白い実験をしています。グループ1には、「ここを引っ張るとこんな音が出るよ。」と一つの仕掛けだけを最初から最後までしっかりと実演付きで説明し、他の仕掛けには触れません。グループ2には、同じ機能を実演して説明しようとしませんが、実演だけした後に説明をせずに退席します。グループ3には、何も説明せずに、一緒に触らせているうちに同じ機能が偶然に実演されるようになる設定。グループ4には全く説明をしません。

結果はどうだったか。丁寧な説明を受けたグループ1の子どもたちは、説明を受けた仕掛けだけで少し遊んだ後で、おもちゃは投げ出してしまいました。その他のグループの子どもたちは説明された以外の3つの仕掛けも見つけることができ、そのおもちゃで遊んでいる時間もグループ1よりも長かったのです。

シュルツ教授は、この実験をごく自然なものだと解釈しました。教え方が丁寧で、手取り足取りであればあるほど、子どもはすでにその司式やスキルを得たと満足して、そこから学ぼうとしなくなるということです。もちろんこの実験のグループ2から4の「教え方」が模範的であるとは限りませんが、子どもの探究心を引き出すという観点からは注目すべきでしょう。確かに、子どもたちが理解するには、ある程度丁寧さは必要ですし、個別最適化も必要です。しかし、時間的な制約があるからと言って生徒に思考・判断させることなく、最初から最後まで教員側がすべて説明し、試験範囲を「やったことにする」ということにならないようにする視点も必要です。過度に丁寧で、手取り足取り教えることで、

彼らが興味関心をつぶしてしまわないよう、十分彼らの反応や表情を確認する。その上で指導方法を工夫しながら、彼らに適切に問いかけ、探究心をさらに引き出し、教師がいないところでも主体的に、時にはお互いの知恵を出して助け合いながら学ぼうとする力を引き出していくことが先にあって、本来の「学び」が成立します。時に必要な「教育的な不親切」。場面によってはこれも活用しつつ彼らを育成していきましょう。

(令和6年6月26日)

4月1日に、先生方へお願いしたこと（確認）

- 1 人間の生き方のモデルを姿で示していただく
- 2 トータル・サティスファクションの実現
- 3 対話とパートナーシップに基づく行動
- 4 全教職員で全校の児童生徒を見守るチームへ